

千葉歴史の散歩道

「千葉」の名を持つセミの発生地を訪ねて

—つるえ 鶴枝ヒメハルゼミ発生地—

千葉県教育振興部文化財課指定文化財班文化財主事 伴 光哲



セミと言われて思い浮かべる種というと、アブラゼミやミンミンゼミを連想する人が多いのではないかと。これらのセミは公園や住宅街でも鳴き声を聞くことができ、なじみ深いと思われる。しかし、千葉県に生息するセミの中に「ヒメハルゼミ」という種がいることを知る人はどれだけいるだろうか。

ヒメハルゼミはヒグラシを小さく、また黒っぽくしたような外見をしているが、木の高い場所に止まっていることが多く、その姿を目にする機会は少ない。6月後半から7月にかけて「ウーン、ウーン……」とも「ジリリオー、ジリリオー」とも表現される鳴き声で集団で鳴く習性を持ち、特に夕方になると、森全体が鳴いているかのような蝉時雨を聞くことができる。関東地方から鹿児島県の徳之島にかけての照葉樹林に生息するが、原生林に近い環境にしか生息できないことに加え、移動能力も低く、全国的にも生息地は限られている。

そんなヒメハルゼミは「千葉」の名を持つ昆虫でもある。本種は茂原市鶴枝の八幡山で採集された標本に基づき、大正6年に新種として記載された。学名には「千葉（県）産の」を意味する“chibensis”とつけられている。鶴枝の生息地は国内有数のものとされ、昭和16年12月に国指定天然記念物「鶴枝ヒメハルゼミ発生地」として指定された。周囲に水田や住宅街が広がる中でひととき存在感を放つ八幡山には、シイ類やカシ類の大木が多く、鬱蒼とした照葉樹林が広がる。こうした環境が八幡神社の社叢林

として保護され続けたため、本種は当地で生き続けることができたのだろう。

身近な文化財の調査を通じ、地域の歴史や自然に対する理解や郷土愛を育むため、地元の鶴枝小学校では毎年セミの抜け殻の調査を行っている。また、本種の生息地が国の天然記念物に指定されていることを普及するため、平成4年7月には市内の電話ボックスに巨大なセミのオブジェが設置された。このオブジェは電話ボックスの撤去に伴って市に寄贈され、現在は天然記念物指定地に隣接する、鶴枝公民館に飾られている。これらのエピソードからも、ヒメハルゼミとその生息地が地元住民に大切にされている様子が伺える。

ヒメハルゼミの大合唱を鶴枝で聞くことができるのは、本種の生息環境や分布が特異的であることに加え、地元の方々が森を守り続けた賜物である。そんなことに思いを馳せつつ、今年の夏はこの不思議なセミの鳴き声を聞きに鶴枝に行ってみてはいかがだろうか？



鶴枝公民館に設置されたヒメハルゼミのオブジェ

千葉教育 桜 (No. 685) 令和6年3月14日発行

編集・発行 千葉県総合教育センター (代表) 鉄井 修一
〒261-0014 千葉市美浜区若葉2-13 TEL 043-276-1204
URL <https://www.ice.or.jp/nc/>
印刷所 千葉市療育センター いずみの家
〒261-0003 千葉市美浜区高浜4-8-3 TEL 043-216-2465